

# 母の歴史

木下 順二 編  
鶴見 和子

河出新書

62

## 木下 順二

劇作家，東京都文京区駒込千駄木町50，大正3年東京生，東大英文科卒，明大教授，代表作「夕鶴」「蛙昇天」「風浪」「瓜子姫とアマゾンジャク」主訳著「オセロウ」

## 鶴見 和子

哲学者，東京都渋谷区代々木初台 608，大正7年東京生，ヴァッサー大学，コロムビア大学院に学ぶ，思想の科学研究会々員，主著「パール・バック」編著「デューイ研究」「エンピツをにぎる主婦」

## 母の歴史

河出新書

昭和29年11月15日 第1刷発行

¥ 100

昭和29年12月25日 第3刷発行

編者 きのしたじゆんじ つるみかずこ  
木下順二・鶴見和子

東京都千代田区神田小川町3-8

発行者 河出孝雄

東京都墨田区東両国4-7

印刷者 福神和三

発行所 東京都千代田区 株式会社 河出書房  
神田小川町3-8

福神印刷

落丁本・乱丁本はお取替えいたします

# の 歴 史

- 日本の女の一生 -



木 下 順 二 編  
鶴 見 和 子

---

河 出 新 書

裝  
幀  
  
庫  
田  
  
藏

## はじめに

紡績工場の中で、四年間の時間をかけて生れた四つのつづり方集の中から、この一冊をつくりました。ページ数のかんけいで、これだけしかおさめられなかったことは残念です。

ひとりひとりの労働者が、自分たちの生活をありのままに書いたひとつひとつのつづり方には、それだけでそれぞれのねうちがあるはずですが、それらはまた、働く人々のあいだに、よい仲間をつくることを助けるはたらきをもっています。書き続けることを通して、お互いどうしささえあいながら、ひとりひとりとしても、また仲間としても成長してきた一つのグループ（東亜紡織労働組合・泊支部とまり・「生活を記録する会」）の歩みを、このささやかな一冊から読みとっていただければ幸いです。

その間の具体的な事情は、沢井余志郎さんの文章がくわしく伝えていきます。この仕事のために地道な努力を続けてきた沢井さんは、それが間接の原因になって、先日会社から解雇通知をうけとりました。それは沢井さん自身が知っているように、この本のためにその文章を書いている時に起ったできごとです。そうした苦しい状態の中で原稿を書きあげて下さった沢井さんにお礼をいうとともに、沢井さんをふくむ「生活を記録する会」の人々へ、心からはげましのことばを送りたいと思います。

このささやかな文集のめざしているものが、さまざまの職場や町や村の中で、それぞれにふさわしい形でひろまりふかまってゆくことを、「生活を記録する会」の人々とともに、わたしたちは何よりもねがっている。

ます。

なおこの本をつくるためにお世話になった、四日市市教育研究所の彌訓也雄（くるべまたお）さんに感謝いたします。

一九五四年一〇月

編者

\*右にいった四つのつづり方集をつくり出したのは次の人人です。この『母の歴史』という小さな本は、ですがら、これらの人人のむすびつきのの中から生れたものなのです。（編者）

井上君子 伊藤利子 伊藤敏子 伊藤久子 石田ふじ子 今東和子 尾崎八重子 大槻千代子 笠置みえ子 梶原  
きぬ江 春日きよみ 春日良子 金子栄子 釜元資子 貴島いつ子 久保田栄子 栗本静 桑沢さわ 小池さつき  
小橋明子 小林あや子 小林邦子 小林ツル 小林律 小牧いわ子 小松貞子 後藤はる 酒井栄子 酒井千代子  
酒井頼子 坂巻久子 向坂敏子 桜井千恵子 沢井余志郎 志賀はるみ 塩沢ふみ 嶋いつ江 下島みどり 白鳥  
正子 鈴木幸子 鈴木久子 田中美智子 田中富貴子 田畑信子 竹下すみ子 登内秋子 登内常子 遠山里子  
徳留リユ子 中井美恵子 中村貞子 野濤静枝 林登志 林正子 林美代子 原双児 原豊子 平野早苗 藤岡貞  
子 藤沢ハチ子 古川喜恵子 古川八重子 堀本三千代 前田美智子 松井国雄 松本とみ子 みやもとすみえ  
三浦和子 三沢邦子 三原節子 三宅昭夫 水谷よし子 宮川文男 宮島容子 向井久美子 矢沢洋子 山下一子  
山下つよみ 山下眸 山下広子 横山栄美子 横山みのり 吉沢光 吉沢みよえ 米山もとえ 綿織蘭子

# 目次

はじめに……………三

I 私の家……………九

『私の家』を出発点として……………勞文文学サークル…一〇

私の家……………鈴木久子…三

家の人たち……………田中美智子…一七

私の村と家……………小林あや子…三

家のこと……………米山もとえ…二七

私の家……………志賀はるみ…三

II 私のお母さん……………四

はじめに……………古川八重子…四

母.....	登内常子.....四
私のお母さん.....	田畑のぶ子.....五
おっかさの話.....	沢井余志郎.....五
私の母.....	坂巻久子.....六
母のこと.....	志賀はるみ.....六
わたしのお母ちゃん.....	鈴木久子.....七
あとがき.....	古川八重子.....七

■ 母の歴史.....八

母の手紙と歴史.....	東亜紡織労組泊支部.....八
母の半生.....	田中美智子.....八
かあちゃんの歴史.....	鈴木久子.....九
三人の母.....	登内常子.....九
あとがき.....	沢井余志郎.....一〇
学習のしかた.....	生活を記録する会.....一〇



Ⅳ あたらしい愛情……………二二

女の問題……………鈴木久子…二三

あたらしい愛情……………三宅昭夫…二三

田中美智子…二三

Ⅴ 『母の歴史』ができるまで……………三三

ノロノロと歩んできたなかまたち……………沢井余志郎…三三

\*

集団創作の体験から……………木下順二…三三

生活綴方と国民文学……………野間宏…三三

『母の歴史』をつくった人たち……………鶴見和子…三七



I  
私  
の  
家

## 『私の家』を出発点として

文学サークルの文集『私の家』が出来上ったのは六月二十二日の日曜日でした。午後、文学サークルの人が最後の仕事として表紙はりを二―三人でしていたのですが、いつの間にかサークルのなかまが二人三人と集まり、しばらくの間に二十人近くの人が集まって一緒に仕事をしているのでした。今日は文集が出来上るといふことがいつの間にかみんなの頭にこびりついていたのでしょう。自分で原稿を出してある人は、待遠しい反面、自分の貧しいあんな家のことがみんなに知れたらどうしようと内面びくびくしていたかもしれせん。その日の仕事は二時間くらいで終り出来上った文集は分配しました。自分の中学時代の先生、又本を読んで知っている無着先生や鈴木喜代春先生や清水幾太郎先生などにも、批判をしてもらい今後の活動の参考にするため一冊ずつ送りました。そして個人では持って帰り一応自分で読んだなら部屋の人にも見せてやることにしました。

今までも文集は二回作りましたが、山びこ学校の藤三郎君に「観念的ダナエ」といわれそうなものばかりですし、事実丘の木さんより、「ただつみ重ねられた丸太棒の山のようです」とか「発展性がない」といわれ、したがってみんなにもよるこんで読んでもらえず押入れのすみに放り込まれていたのでした。けれど今度の文集は、丘の木さんのいわれたことや、山びこ学校、みつばちの子などを読んでありのままに書くことを学んでからのものですから、前のは少し違うように思います。やはり原稿を出す時あんなに苦しんだ内容のものですから何もかも書いてあります。「本当のことをありのままに書くことは一番大切なんだ」。文

集を読んだ人はみなこんな気持ちで、次の労文山びこ学校に出席しました。いつもより出席人数がずっと多く話も活発に進みました。

はじめに送金の問題が出ました。この文集を書いた人は大体家へ送金しているということに気がついたのです。滝沢さんはいいました。

「僕は送金しようとは思うんだけど今の状態ではどうしてもできない。使い方が下手だろうか。」  
みんながやがやいいだしました。

「しないからできないのよ。しようと思つたらできるよ。」

「でもおかしいわね。大体同じ給料で片方は送金できて片方は送金できないなんて。」

「それだけ家の貧しさが違うんじゃない？」

「ちょっと、ちょっと。」

三宅さんが大きな声でみんなのがやがやを制止して丘の木さんの批判を読みあげました。

「……会社では、貴女方が家へ送金する分まで給料を払っているでしようか……」

しんとしてしまいました。そして昨年の年末一時金要求の時のマーケット・バスケットを思いだしていました。あれには確かに送金のことは書いてありませんでした。私たちが一人前の正月をむかえられるために、食物や衣服の生活資金を要求したのです。

ここまで話がすすんでくるとみんなは一つの矛盾につき当りました。

「会社では私たちの生活を保障するために給料を払っておきながら、貯金や送金を強制的といつていいほど奨励するのは何故かしら？」

「それよりもねえ、自分の生活費に給料をもらっておきながら送金を当りまえと思っているみんなの態度はどうかしら。」

これに対しては、家が貧しいとか色々の意見が出ましたが、この労文山びこ学校では解決がつきそうもありません。

西ヶ崎さんが提案しました。

「これはここだけの討論では解決がつきそうもないね。寮中の人を調べたら何か結論でないだろうか。」

みんな賛成、先ず中心になって調査にのり出す人をきめました。春日さん、林さん、尾崎さん、志賀さんが推薦され、次に方法です。

「調査というとか固苦しいから綴方に書いたらどうでしょう。」

という意見がでたので「うわー」といううれしそうな悲鳴をあげて賛意を表しました。今日ここに集まっている人が自分の部屋の人の送金の額やら家の状態や、送金に対する当人の態度などを調べて綴方に書くのです。

文集についての第一回の労文山びこ学校はこれで終わりました。送金の声に聞いただけでも一杯わからないことがあるのです。農家はどのようにして貧しいか、工場労働者の生活が戦後の農村と比較して楽なのは何故か。それは労働組合があるからではなからうか。とすると農村にはどうして組合が作れないだろう。私たちが農村へ帰るまでに工場の何を一番学ばなければならぬか……など考えれば考える程問題は大きくなっていきます。そして、より寮生にとって切実な問題になっていきます。労文山びこ学校だけでは解決できないこと、討論しただけではすまされないことです。

私たちはこの文集を出発点として、私たちの生活をより豊かな強力いものにして行く方向に進みたいと思つていきます。

こんど文教部で文学サークルのなかまだけでなく組合のなかまみんなに、私たちが書いた綴方を印刷して配るとのことですので、こういふことは私たちだけではなく一人でも多くのなかまと一緒に研究、実践して行きたいと思つていきます。

尙、私の家の文集について、学校の先生方や多くの心を同じくする人たちより沢山の批評感想文が届けられました。多い時には日に三通も来た時がありました。一通くるごとに、歓声をあげて寄り集まり、まわし読みをしています。力づけられると共に考え方の浅はかさやまだまだ観念的からぬけだしてないのを反省したりしています。感想を送ってくださいました。本当にありがとうございます。

皆様方の熱意に応える方法として、私たちは今までより以上に実践して行こうと話しています。

一九五二年八月三十日

労文文学サークル

## 私 の 家

鈴木 久子

私の部落は（百五十戸）山のすぐふもとにあります。水のないのは有名です。山のふもとにありながら、

なぜ水がないのかというと山の水糧は両側の部落にそれてしまうからです。(私の部落の背にある山の峯を家の屋根として考えて下さい。南むきの家だとちょうど雨の落ちない東の軒のようなところに百五十戸あるのです。) 飲む水も井戸を掘ったり、水道を引いたりでやつと暮しているしまつで水田を作ることができない。もし作っている人があるならその人は遠い他部落で田地を借りて作る人でしよう。私の家は勿論、田は作っていません。畑を現在一町三反作っておりますが、戦時中は自作六反、借りた地を四反、あわせて十反歩作っていたわけです。これが終戦の農地改革で借りていた四反が自作になるということになったわけですが、この四反のうち一反は地主が新宅をたてるのかであるとの三反が手に入ったのです。この手に入った畑のすぐ下に林があつて(ここに行くとき夏などよく涼んだ林です)これが農地改革と共に開こん地となりました。家ではこの開こん地四反を買つて現在の一町三反になったわけです。この開こん地四反を畑としてたがやしてから五年余りになっていますが、いまだに収穫がすくないことを兄の便りで知りました。こんなぐあいでも全くこれだけの面積では決して満足な生活はできません。

田を一町三反作ることには大きなことでしようが、畑は雑こくだけしか収穫ができないのです。これは土地の条件と環境、又は氣候などで違つてきましようが、大体畑は雑こくときまっています。満足でない家は私の家ばかりではないようです。なぜって、私の部落を平均として一家が生活の上においての必要な面積は一町五反を最低の面積として考えられています。これが現在の面積では、平均一町二反といったところだそうです。ですから部落の大方が赤字となつてゐることがわかります。四年前までは一にも二にも食糧の時代で肥料、農器具は安く手に入ることもでき、又このごろさかんだつた闇をすれば、相当の金になつたわけです。(闇も大百姓でなければ大きなことはできなかつたわけですが)でも、こんな生活が長くつづくはずはありません。



ません。食糧もよくなり、質より量でなく量より質に返った現在でも米はまだまだたりないと思いますが、雑こく類野菜などはあまりに出まわらなくなりました。供出も米をのぞいた雑こく芋類はしだいに用をなさなくなってきた。悪くいえば供出をしたくない時は無理にも取って行かれ、少し値がよくなった現在では願っても取ってくれないといった形です。それでこの雑こくを水田を作る村々に売ってこの金で米を買うわけです。つまり交かんといったような。この交かんした米を私の家では八人家族のところ三人は工場に出ているから五人で食べているわけです。これが月々一俵を必要として一年に五万円の金がかかっているのだそうです。すると畑の収入（雑こく）が一反で一万円として米を買うだけで五反を要し、月々一俵でたりないのでそのたしに粟、麦も食べて行く。これが三反は必要とし、つまり食糧だけで八反とみてあとに残った面積は開こん地の収穫のすくない四反と一反だけです。この一反と開こん地の四反が生活費になるわけですが、農業を運営するに最も必要な肥料代、この肥料代も米の値と共にぐんぐん上って二十四年頃、硫酸一俵六百二十拾円くらいのものが今年では千円に上って磷酸は三百五拾円が六百八拾円に上っているとのことです。でも一番高いのは農器具でこれは手が出せないといって買っていかなければ仕事の能率が上らず無理しても買って行かねばならない。農器具の代はわからないが肥料代としては最低で二万五千円はどうしても必要だととして、この肥料代をやつと払って農器具どころか生活費は少しもだすことができないのです。

それで一反から一万円より上廻るだけの収入を考えねばなりません。そこで兄はこんな便りをくれました。「全く一反から一万円の収入ではやっていけない。少しでも収入を多くするために栽培技術を良くし増産すると云うことと、時代の要求するものを見通して作らねばなりません。時代の見通しといえれば面白いことがあります。二十四年に家では四畝ばかりの所に大根を作りそれが二百五十貫ばかり収穫ができ、これ